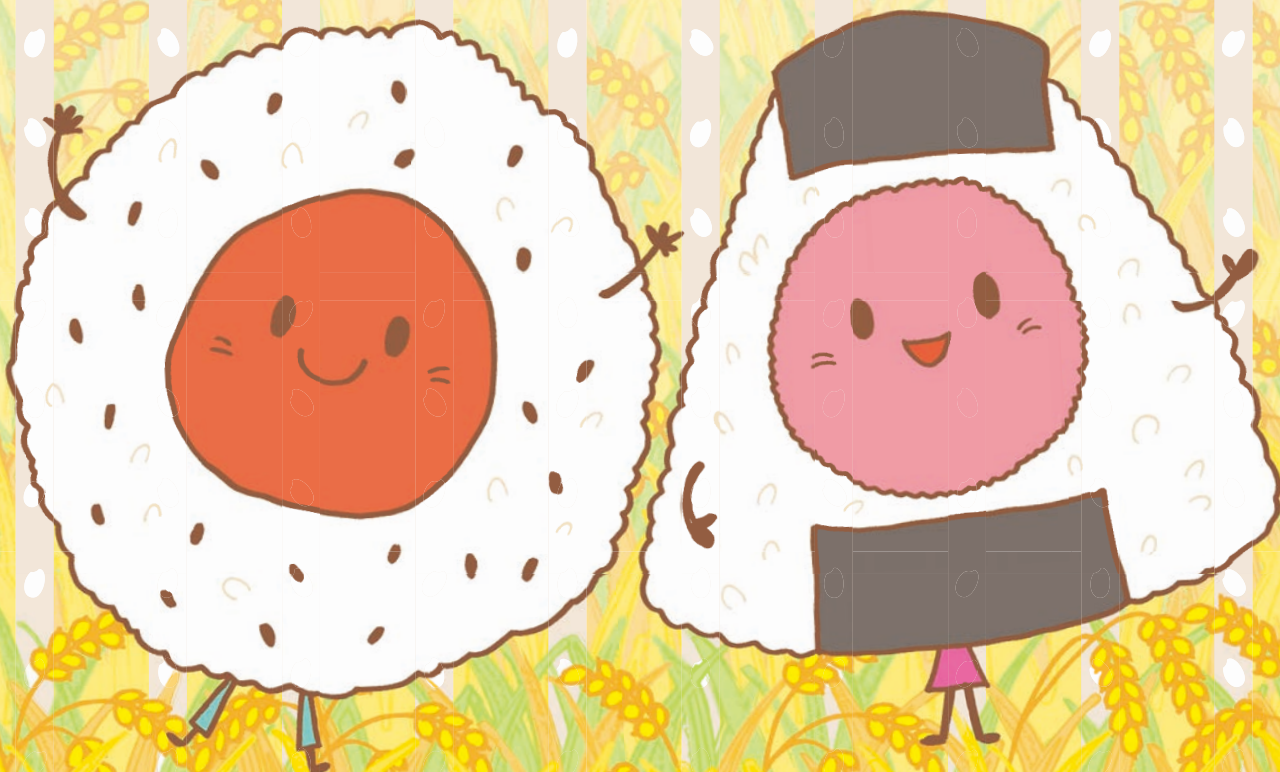




第41回 作文・図画岩手県コンクール作品集

ごはん お米とわたし



目次

◆ごあいさつ.....	1
JA岩手県中央会 会長 藤尾 東泉	
◆図画部門入賞作品.....	2
◆作文部門入賞作品.....	9
◆総評.....	16
審査委員長／元岩手県教育委員会教育委員長 八重樫 勝	
◆図画部門を審査して.....	16
元岩手県図画工作・美術協議会 会長 伊藤 満久	
◆作文部門を審査して.....	17
盛岡市教育委員会事務局学校教育課 主任指導主事 小林 満	
◆コンクール入賞一覧.....	18
◆コンクール概要.....	22



いあいわ

JA岩手県中央会

会長 藤尾 東 泉

第四十一回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに、作品をご応募いただきましたみなさまにお礼を申し上げますとともに、入選された方々には心からのお祝いを申し上げます。

このコンクールは、子どもたちに、お米やごはん食がどのように作られ食卓に並んでいるのか、そして、稲作が地域において、どんな役割を果たしているかなどを知っていただくことを目的として、昭和五十一年から実施いたしております。

四十一回目を迎えた今回も、県内各地から作文八十六点、図画二四八点もの力作が寄せられました。この中から全国コンクールにおいて、作文部門一点が農林水産大臣賞、図画部門二点が優秀賞に選ばれました。本当におめでとうございます。

みなさまから寄せられた作品を拝見いたしますと、家族で食事をする様子、またごはんをおいしそうに食べる姿や、米作り・稲作体験を通じた苦労や楽しみ、そして毎日の食事に対する家族や生産者への感謝など、日頃の体験や出来事を生き生きと的確にとらえており、素直な感性にあふれていました。

次代を担う子どもたちの意識の高さに、あらためて目を見張るとともに、日本農業の将来や、ごはん食を中心とした日本型食生活の継承に、大きな期待を抱くことができました。

JAグループでは、日本の「食」とは何かを考え、その「食」を生み出している日本の農業を好きになっていただくという取組みを全国的に進めております。「食」の未来をつくることは、日本の未来をつくることにつながります。その中心となるのが、古くから日本人の食卓に並び、親しまれ、日本の食文化を築いてきたお米です。

このコンクールを通じて、自然を大切にする心、家族や友人を大切にする心、地域の人たちへの感謝、伝統ある食文化への敬意、そして、心を込めて育てられたお米のおいしさや農業のすばらしさ、岩手の大地に対する感謝の気持ちを忘れずにいてください。

最後に、今回ご応募いただいた学校の先生方をはじめ、関係するみなさま方のご支援とご協力に感謝を申しあげ、ごあいさつとさせていただきます。



ぜんこくゆうしゅうしょう
全国優秀賞
いわてけんきょういくちょうしょう
岩手県教育長賞

「おいしいごはんをたべるぞ」

ふじ わら れん
藤 原 怜
はなまき しりつうちかわ め しょうがっこう おん
花巻市立内川目小学校 2年



ぜんこくゆうしゅうしょう
全国優秀賞
いわてけんちじしょう
岩手県知事賞

「大好き」

お やけ さ ゆき
小 宅 紗 由
もりおか しりつしょうとうちゅうがっこう おん
盛岡市立城東中学校 2年



図画部門

いっばんしゃだんほうじんいえ ひかりきょうかい
一般社団法人家の光協会
ほっかいどうとうほくふ きゅうぶん か きょくちようしょう
北海道東北普及文化局長賞

「田植えをしたよ」

伊 藤 愛 来

きたかみ しりついいとよしょうがっこう ねん
北上市立飯豊小学校 3年



図画部門

じえいいいわ て けん ご れん か いちようしょう
JA岩手県五連会長賞

「おばあちゃん草刈りご苦労さん」

古 川 このみ

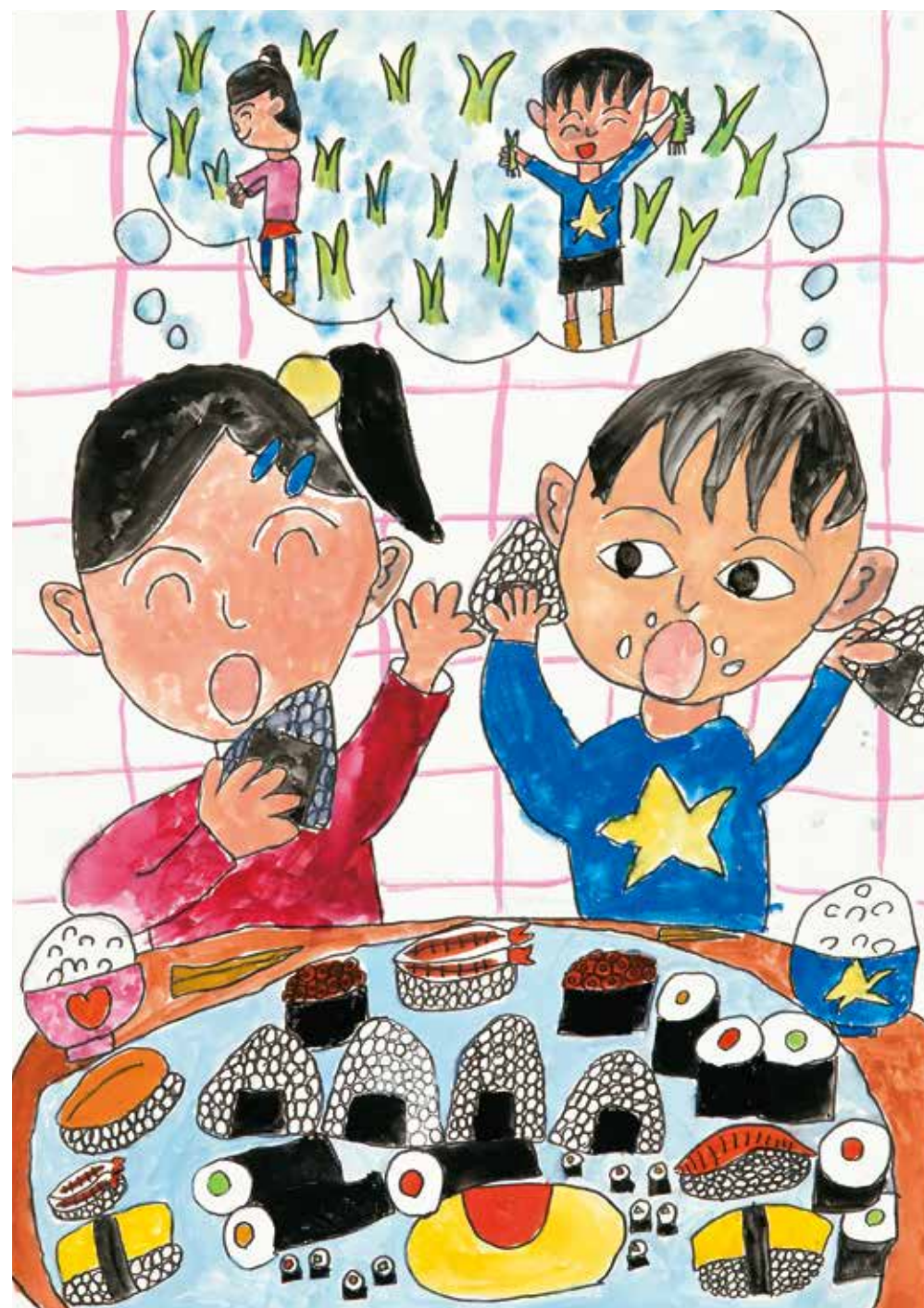
おおふな と しりつりょうりちゅうがっこう ねん
大船渡市立綾里中学校 2年



「ごはんはやっぱりおいしいよ」

たか はし な お
高 橋 那 緒

きたかみ しりつ えぶり こしょうがっこう ねん
北上市立江釣子小学校 3年



「お米とわたし」

き もと こ はる
木 元 小 春

とおの しりつとおの きたしょうがっこう ねん
遠野市立遠野北小学校 4年



「僕と未来をつなぐ米」

はたけ やま こう
畠 山 公
おおふなとしりつさかりしょうがっこう
大船渡市立盛小学校 6年



一番好きな食べ物は何かと聞かれたら、僕は胸をはって「ご飯」と答える。日本人で良かった。おいしいお米を食べ続けるにはどうしたらいいのだろう。

僕は食物アレルギーがあり、米そのものではないが、米の栽培に使う農薬に反応してしまった。そんな僕でも食べられるものは何か。母は安心できる食べ物を探し、無農薬のお米で僕は命をつないだ。ぼくは将来お米の研究をして、農薬を使わなくても丈夫に育ち、その上おいしい品種の米を作る農業研究者になりたいと思った。

そのために今の僕にできる事は何か。まずはお米を育ててみようと思った。春、知り合いの農家から稲もみを分けてもらい、ベランダにバケツを六つ並べた。朝晩の水やりが日課だ。覚悟はしていたけど、ビックリするほど雑草が生えてきた。バケツサイズだから、大丈夫と思っていたら甘かった。図鑑で調べたら十種類以上！。実際の田んぼで除草すると思ったらもっと大変だ。農薬に頼る気持ちもわかった。無農薬で育てている人はどれほどの苦勞をしているのだろう。気が遠くなった。

知り合いの農家ではアイガモ農法をやっているが、バケツ稲にアイガモは向かない。他に除草する方法はないか調べようとしたら、ある本に出会った。主人公高柳さんは東京の米屋さんだ。高柳さんによると、アイガモ農法の他にコイ・フナ農法、田起こしや代かきを行わない不耕起農法、カブトエビ農法などがある。高柳さんおすすめのカブトエビは僕のバケツ稲に今年は間に合わないから、今は地道に

抜くしかないけれど、すごい方法があると分かってうれしくなった。

高柳さんがカブトエビ農法に出会ったきっかけは平成の米騒動だ。高柳さんは「日本人にはやっぱり日本の米がいい。安心して食べられる米が必要だ。」と考え、行動した。

僕は自分の視野が狭かったことに気づいた。おいしくて安全な米を食べ続けるには、農業研究者と農家の人だけではなく、消費者が必要だ。安定して買えることも大事だ。作る人と食べる人がつながり、日本中の人が安心しておいしいお米を食べられたら幸せだ。農薬も必要かもしれないけど、できれば無農薬がいい。僕が目指している農業研究者の力もきつと必要だ。自分ができることをして助け合い、認め合い、つながるともっと豊かになる。

お米作りは日本そのものだ。複雑で大変だけれど、命と知恵があふれている。日本という国が平和で美しいのはお米を通してみんながつながっているからだと思う。

僕のバケツは世界を小さくしてみたみたいだ。稲と草以外にも生き物がたくさんいて争ったり仲良くしたりしている。上手に育てるとお米一粒から一万粒とれるらしい。つながりを信じて世話し、秋の収穫を待ちたい。そして来年はカブトエビ農法に挑戦してみたい。

「私とカレーライス」

おおむかいあやこ
大 向 絢 子
もりおかしりつみるまえちゅうがっこう
盛岡市立見前中学校 1年



「もちごめごはん」

きく ち ゆう か
菊 池 優 花

おうしゅう しりつ き ざい く しょうがっこう ねん
奥州市立木細工小学校 2年



「ゆう花、りんちゃん、もちごめのごはんたべる。」
ママが聞きました。おきたばかりで、目もそんなにあい
ていませんでしたが、
「たべる、たべる。」
わたしと、りんちゃんがこたえました。ママは、ごはんを
じゅんびしています。まっている間に、りんちゃんと朝の
したくをしました。早くたべたい、わくわくするな。一年
生の時にたべたもちごめごはん。あじつけごはんにしても
おいしかったけれど、白いままでもすごくおいしいです。
しばらくすると、ママが
「できたよ。どうぞ。」
と、もちごめごはんを大きなおさらに一つ、もってきてく
れました。
「りんちゃん、もちごめごはんだよ。」
と、りんちゃんをよびました。はなれていてもおいしそう
なおいがします。ふつうのごはんよりもつやつやしてい
ておいしそう。手を合わせて、
「いただきます。」
二人でいっしょにたべました。もちごめごはんはもっちり
しています。かんでいるとお口の中でこめのあまいあじが
ひろがります。一口たべたら、たまらないくらいおいしい
です。
「おいしい、おいしい。」



「すごくおいしいね。」
二人で言い合いながらたべました。あつという間におさら
のごはんはなくなりました。
「うちそうさま。」
わたしも、りんちゃんも大まんぞく。また、たべたいなあ
と思いました。
ほんやりしていたあただが、ごはんをたべたら一しゅん
でねむ気がとれました。ごはんってすごいなあ。きょうも、
学校でなわとびやマラソンをがんばれそうです。そして、
もちごめパワーでベンきょうもがんばるぞ。

「思い出の味」

よし だ ゆう と
吉 田 優 斗

もりおか しりつじょうせいちゅうがっこう ねん
盛岡市立城西中学校 1年



僕は、母の作ったご飯が大好きだ。しかし、ここ二年間
一度も食べていない。いや、もう二度と食べることができ
なくなってしまった。
小学校の運動会の日、僕が一位をとれなくても、母は、
「頑張ったね。」
と言って、いつもカレーライスをつくってくれた。僕は、
炊飯器のご飯がなくなるまでおかわりをして食べた。母の
カレーが僕は大好きだった。僕の誕生日の一月二十二日は、
「カレーライスの日」である。だから、母はいつもカレー
を作ってくれた。
カレーライスの他にも、母が作ってくれるご飯は、どれ
もおおいかった。親子丼やマーボー豆腐、しょうが焼きな
ど、ご飯がすすむものばかりで、僕はいつもおかわりをし
て食べた。日曜日の朝食は、いつもきまって焼きじゃけと
ほうれん草のおひたしとみそ汁だった。このメニューは父
の好きなもので、日曜日の朝は家族五人そろって食べてい
た。この何気ない毎日の食事、特別な日に食べるカレーラ
イス、母がいつも心を込めて作ってくれたご飯をいっぱい
食べて、僕はここまで大きく成長してきた。
母は重い病気にかかっていた。僕が小学校五年生の時、
その病気が悪化して緊急入院することになった。僕は、す
ぐに退院してまたおいしいご飯を作ってもらえると信じて
いた。しかし、母はなかなか帰ってこなかった。最初入院
した病院では、子供はカゼやインフルエンザをうつすおそ
れがあるということで、僕は病室に入れてもらえなかった。
そのため、父から様子を聞くしかなかった。その後、母は
別の病院に転院し、そこでは面会は許されていたので、僕
はようやく母に会えた。僕はできるかぎり母のお世話をし

た。少しでも力になりました。日曜日にしか行く
ことはできなかったが、毎週欠かさず会いに行って、一週
間の出来事などを話してあげた。母はいつも喜んで僕の話
を聞いてくれた。
その後、間もなく病院の先生から余命一カ月であると宣
告された。だから僕は、毎日母のところへ行くようになった。
毎日会うたびに母の具合が悪くなっているように思え
た。そして、八月十四日午前四時五十八分、母は僕たちの
手の届かないところに行ってしまった。頭の中が真っ白に
なった。もう二度と母が作ったご飯を食べることができな
いのかと思うと、とても悲しくなった。入棺の日に冷たく
なった母の手に触れた時、あのカレーライスのことを思い
出し涙があふれた。叶うことなら、もう一度あのカレーを
お腹いっぱい食べたいと思った。
僕は今年中学生になった。バドミントン部に入ったが、
今は始めたばかりで、まだまだ技術的にも体力的にも未熟
だ。これからもっとたくさんご飯を食べて体をきたえ、天
国の母にバドミントンで頑張っている姿を見てもらいたい
と思っている。母の自慢の息子になれるように、これから
も努力していきたいと思う。
今はもう、あの頃のように母の作ったご飯を食べること
はできない。しかし、家族五人で過ごした楽しい時間と母
のおいしいご飯の思い出は、僕の大切な宝物として一生心
の中に刻んでおきたいと思う。僕が大好きだったカレーの
味、きつといつかまた思い出す日が来るのだろう。それは、
一年後かもしれないし、五年後、十年後かもしれない。ど
んなに時間がたっても思い出の味は変わることがないだろ
う。

「お米と話す」
かく しま ゆう み
角 嶋 優 美

ひろ の ちやうりつしゆく のへちやうがっこう ねん
洋野町立宿戸中学校 1年



毎日の食卓に並ぶご飯——それはほかほかの白米と、ほどよく味のついたおかずとみそ汁。食事をとてもおいしく作ってくれる母、毎日一生けん命働いて私たちをやしなってくれる父、たまにケンカすることもあるけど勉強を教えてくれる姉、そして、そんな姉とケンカしながらも勉強を教わる私。この家族四人がそろって食べるご飯は、特別においしい。ご飯を食べながら、父は職場であった話を、姉は学校での出来事を話す。その話を、母は幸せそうに聞いている。

私は、三人の話し声を聞き、幸せそうな顔をチラッと見て、ちよつとだけほえみながらご飯を食べ続けるのだ。

私は、人の顔を見て話すことが苦手だ。でも、お米には顔がないから私でも見つめることができる。ご飯を食べながら私は、お米とコミュニケーションをとってみた。

私「今日もおいしいよ、ありがとう。」

お米「いやいや、おいしく食べてくれてありがとうね。」

などと、家族の話を聞きつつこんな会話を心の中でして、ついついにやけてしまう。いつしか私は、お米を家の中の親友と思うことにした。お米といろいろな会話をしているうちに、小学生の頃、田植えをしたことを思い出し、さらに今も昔も農家の方たちが田に向かって必死に仕事をしている姿が浮かんできた。

お米はなぜ白いか、水につければふくらむのはなぜか、いろいろな食材に合いおいしく食べることができるのはなぜか、などと次々と考えていくのは、何となく答えがわかったりわからなかったりで、楽しくなってくる。

私は、白いごはん、炊き込みごはん、おかゆとお米の料理のことを思い、頭の中でおいしい料理を作る。実際に作ってくれるのは母だ。私が熱が出て具合が悪いときは、母はおかゆを作ってくれる。とてもおいしい。

お米は、絶対に飽きない味だと思う。毎日食べているのに、他の料理のように、「もうあきた、ちがうものが食べたい。」とは思わない。我が家では、たまに炊き込みごはんにすることもあり、何度もおかわりしてしまうくらいおいしいけど、やっぱり私は何のおかずにも合う白米が大好きだ。

たまに、父の帰りが遅くなるときや、家族のだれかいない時に食べる食事は、いつもよりおいしいと思えなくなる。人の顔を見て話すのが苦手な私は、ご飯を食べているときは、ほぼ手元のご飯だけを見ているけど、食べながら聞いている会話を誰か一人がいらないだけで、いつものご飯の味が違って感じるのには不思議だ。家族全員で食べるときは、食卓に笑い声がうるさいほどびびく。みんなそろって食べるとういしい。きつと、目に見えない何かがおおいしくしているのだろう。その「何か」は家族の笑顔だろうか。

毎日のご飯は、心を温かくしてくれ、人を笑顔にしてくれる。そのご飯を、感謝しながら食べることが大切だと思う。

今日もおいしい食事をありがとう、母さん。毎日仕事おつかれ！父さん。しっかりした姉さん、大好き。そして、毎日私の口に運ばれるごはん、いつもありがとう。これからもおいしく食べていくからね。

「くるみもち作り」
きく ち あす か
菊 池 飛 鳥

おうしやう しりつ きざいく しやうがっこう ねん
奥州市立木細工小学校 6年



「飛鳥、早く起きて。」

お母さんの大きな声で目が覚めた。今日は元旦。朝のもちつきが始まっている。

「飛鳥、遅い。馬屋の所におばあちゃんがいるから、早く手伝ってきて。」

私は馬屋に走った。

「おう、飛鳥か。ちよつと待ってろ。」

もちをついているおばあちゃん。私の方を一瞬だけチラッと見た。吐く息が白い。「ボフッ、ボフッ」もち米がもちになりかけている。

「何か、ふとんみたいな音。」

一人言をつぶやいた。

「ほれ、よっこいしょ。」

おばあちゃんは、小麦粉がしかれている緑のテーブルに、もちを勢いよく落とした。「ドソッ」。大きな音が部屋中にひびいた。

「なに、ぼおつとしてんだ。ほれ、指で輪を作って。ちぎって丸めてみろ。」

大きな声。私の出番。教えられたとおりにやってみた。大きさを均等分けるのが難しい。それでも、だんだんコツをつかんできた。

「飛鳥。ほれ、口開けろ。」

言われたとおりに口を開けたら、

「あつち。」

おばあちゃんが、あつあつのおもちを私の口に入れた。おもちをよくのび、すぐには飲み込めない。かめばかむほど甘くなり、おいしい。もち米の香りが口中にふんわり広がる。

る。

「飛鳥。終わったから、今度はお母さんのほうさ行け。」

走って台所へ行った。

「ああ、飛鳥。ほら、パス。」

お母さんに渡されたのは、すりこ木とクルミが入ったすりばち。

「これもやるの。」

「当たり前。」

お母さんは、勢いよく返事をしたかと思うと、さっさと自分の仕事を始めた。智果と一緒にくるみすり。「ゴリゴリゴリ、ペチッペチッ」すりこ木でくるみをこする。最後はおばあちゃんの味つけで、くるみだれが完成。

「お母さあん、出来たから、もち持ってきて来てねが。」

と、おばあちゃん。お母さんが、智果と一緒につきたてのおもちを持って来た。真っ白い、やわらかいおもちに、くるみをたっぷりとからめて皿に盛る。そこに、おじいちゃんとお父さんも入って来た。

「じゃあ、朝ご飯にするか。」

みんなの皿には、出来たてはやはやの、みんなで力を合わせて作ったくるみもち。

「いただきます。」

ぱくり、もぐもぐ、もぐもぐ、もぐもぐ、ごつくうん。甘い。おいしい。やわらかい。みんなで作ったから、その分おいしい。みんなこぼれるニッコリ笑顔。今年もおもちがみんなの笑顔をはこんでくれた。新年のおもち作りは、みんなの笑顔をつくる大切な行事だ。

「農業と食育に学ぶ」

菅野蓮未

花巻市立石鳥谷中学校 1年



私は、お米が大好きです。私の家では、祖父が育てたお米を食べています。

私達一家は、毎年、母の実家へ行き、稲かりの手伝いをしています。主にかり終わった稲を干す作業を手伝います。力仕事が多くとても大変で、正直あまり行きたくありません。でも、手伝いをする事で、農家の方々の大変さが学べるので、最後は「手伝いに来て良かったな」と思えます。

祖父は、機械を使わずに今ではめずらしい「はせ掛け」を行っています。はせ掛けとは、木を鉄棒のように組み立てたはせにかかった稲をかけ、天日干しする作業のことです。機械を使った方が楽だし、時間短縮にもなるのにも思ってしまうのですが、そこには、祖父のこだわりがあるそうなのです。「昔ながらのはせ掛けをすることで水分が保たれる」と言っていました。初めのうちはどうしてそんなことをするのか分かりませんでした。今では何となく分かる気がします。手作業でやる方が気持ちいいのも、きっと何百倍もおもしろいのではないのでしょうか。

私は小さい頃、パンの方が好きでした。あまり覚えていないのですが、パンの方が甘かったり、味がついていたりかだと思えます。逆に、お米は味もあまりないので、好きではありませんでした。小学校四年生頃には、稲かりの手伝いをして、農業の大変さを知ること、お米が好きになっていきました。そのままでよし、味をつけてもよし、そして何より、農家の苦労と努力と愛の結晶であることを身をもって体験しているため、お米の良さ、おいしさが分かっています。

もう一つ、お米が好きなようになった理由があります。それは、母の食育です。私や妹達は、好き嫌いが多く、食べ物を残

すこともありました。「えー、だっておいしくないもん」と、ずっとそう言い続けて、食べ物も残し続けました。そんな私達に、母はこう言いました。

「作ってくれた人が目の前にいるんだから、そんなこと言わない。食べ物を好き嫌うする人は、人も好き嫌うするから。」

…はい。そう返事するしかないくらいに、正しすぎる言葉。「ちゃんと食べなきゃ。頑張つて。」その言葉がきっかけで、私は、苦手な食べ物をできるだけ残さないように努力するようになりました。

そう。お米を育ててくれた人が。調理してくれた母が。みんなに食べてほしくて、頑張ってくれた人達がいる。本物の農家の人ほどではないけれど、農業の苦労を少しでも知っている。だからこそ、気付くことができた、「食」の大切さ。私は当時、お米があまり好きではありませんでしたが、もし自分があんなに大変な思いをしたお米を残されたら…。どんなに辛いだろう？そう考えるうちにお米をよく食べるようになり、今では大好物になっています。

私は今、この作文を書きながら、今年の秋のことを想像しています。今年も一生懸命働こうとか、どんなことを学べるだろうなどと、そんなことを、ほんやりと考えています。そして、再び「食」について考えることができました。

私の夢は管理栄養士になることです。これからも農業の手伝いを通してお米の良さを知り、いつか他の人にも伝えられたらな、と思います。そのためにも、春に植えた苗を今年の秋にかり取って、祖父こだわりのはせ掛けをしたいです。

「みそおにぎり」

菊池 怜史

奥州市立木細工小学校 3年



「朝ごはん、何にしようかなあ。」

母ちゃんはお仕事でつかれてねています。ぼくたち兄妹で朝ごはんを作ろうと思います。

「みそおにぎりが食べたいな。」

ぼくの一言で、メニューが決まりました。

「さーいよに、まいがごはんをにぎりしました。」

「ああ、くずれちゃった。」

丸いおにぎりにはなりません。次にぼくがちょうせん。

「手がべたべただな。」

お水をつけずにぎったので、バラバラになってしまいました。のぞむくんがやったら、上手に丸くおにぎりができました。さすが、お兄ちゃんだと思います。

次に、みそをスプーンですくって手につけました。みそってなんだか温かい。その手でおにぎりをにぎっていきます。真っ白だったおにぎりがだんだん茶色になっていきました。

「このままでもおいしそう。」

でも、がまん。がまん。パリッとやけたみそのほうがもっとおいしいんだから。

「これは、あぶないからとつとがやるね。」

魚やきのところに、おにぎりをならべました。少したったら、みそのこげるいいにおいがしてきました。

「できたよお。」

まちきれなかったまいが、魚やきのところを開けて見ました。あつあつ、ほかほかのみそおにぎりができました。

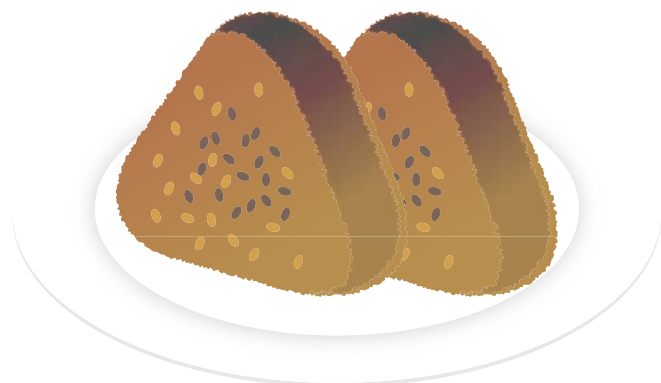
「あちあち。」

すぐにはさわれなかったけど、

「いただきます。」

みんなで手を合わせていただきました。口の中であつあつ、ふわふわのごはんがみそとまざっておいしかったです。

ぼくたちで作った朝ごはん。上手にはきれなかったけど、ごはんとおみそのパワーで、今日もがんばれそうです。



総 評



審査委員長
元岩手県教育委員会
教育委員長
八重樫 勝

四十一回目を迎えたこのコンクールに、今年もたくさんのすばらしい作品が寄せられました。

このコンクールは、日本の主食であるごはん・お米について考えたことや感じたこと、農業について体験したことや学んだこと、家族との関わりについて考えたことなどを、作文や図画で表現することを目的として実施されてきました。

児童生徒数は年々減っていますが、応募作品は昨年よりも一〇〇点ほど増え、このコンクールに寄せる期待の大きさを感じます。

十月の県の第一次審査会で、全国コンクールに応募する十八点を選びました。

全国コンクールでは、作文部門で、大船渡市立盛小学校六年・畠山公君の作品が農林水産大臣賞を受賞。図画部門では二点が優秀賞に選ばれました。農林水産大臣賞の受賞は平成十六年以来の快挙です。

十二月に県の二次審査を行い、各賞を決定しました。受賞した皆さん、ご家族の皆さん、指導された先生方、おめでとうございます。

作品全体を通して、作品を作るために、対象物をよく観察していること、体験したことをくわしく思い起こしていることなどが感じられました。いい作品に仕上げるために、根気強く、ていねいに取り組んでいる様子が伝わってきました。

また、学校での生活の様子、家族との温かいふれ合いや支え合いの様子なども作品から感じ取ることができました。

ごはん・お米を大切にすることや農業を守る重要

性について表現された作品が多くあったこともうれしいことでした。

〈図画の部〉

・選んだ題材がごはんを食べているところだけでなく、田づくりや田植え、収穫、そして一連のお米づくりへの感謝の心情まで、心が豊かになる作品が多かった。

・画面への効果的な入れ方（レイアウト）に工夫をこらし、画面いっぱい食べられている表情や人物の近景から広がりのある田園風景まで、観る側のノスタルジーを引き出す好感の持てるものばかりであった。

・着色については、主題をよく引き立たせるよう補色（反対色）の組み合わせ、筆のタッチの太細の使い分け、淡彩から重色までの技術を発揮した力作が多かった。

・米づくりの大切さと感謝の気持ちが伝わってくる作品ばかりであった。

〈作文の部〉

・1部（小学校一年生～三年生）は、家庭における料理体験での家族との温かなふれあい、2部（小学校四年生～六年生）は、学校や地域での米作りの体験に留まらず、米作りの歴史や探究したことを詳しく書いている。小学生は、自分とごはんの身近なかかわりの中で感じたことを素直にまとめている。

・中学生は、家族や様々な人とのかわりから、自分の生活を見つめ、食や生産者への感謝の思いをよく表現している。社会と自分の生活を関連付けて考え、表現しており、ものの見方、考え方に広がりや深まりが見られる。

・優れた作品を広く周知し、取り組みの裾野を広げていきたい。

国の内外を問わず、食糧や農業の問題が、いろいろと取りざたされています。小中学生の鋭い観察眼で社会を切り取って、またすばらしい作品の応募を期待しています。

作文部門を審査して



盛岡市教育委員会事務局
学校教育課主任指導主事
小林 満

第四十一回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに、今年度も多くの学校、児童生徒の皆さんが応募してくださいました。応募作品が増加したこと、どの作品も、自分の生活と「ごはん・お米」とのかかわりについて、五感を通して感じたこと、考えたことをしっかりと綴っていることにうれしさを感じます。

名誉ある農林水産大臣賞及び岩手県知事賞を受賞した畠山公さん（大船渡市立盛小学校六年）の「僕と未来をつなぐ米」は、無農薬で稲を育てるために、熱心に探究する中で得た知識や情報と体験と結び付け、考えを書きまとめているので、説得力がありました。ものの見方や考え方の広がりを感じられる、大変素晴らしい作品でした。

岩手県教育長賞を受賞した吉田優斗さん（盛岡市立城西中学校一年）の「思い出の味」は、お母さんの思い出の味を心に刻み、自分の生き方を見つめ、悲しみを乗り越えて頑張っている姿が伝わってきました。優斗さんの頼もしさを感じられ、心に迫りました。

J A岩手県五連会長賞を受賞した菊池優花さん（奥州市立木細工小学校二年）の「もち・ごめ・ごはん」は、もち・ごめ・ごはんの様子が分りやすく伝わるような言葉を選び、上手にまとめました。もち・ごめ・ごはんの美味しさが想像できました。

家の光協会北海道東北普及文化局長賞を受賞した菊池飛鳥さん（奥州市立木細工小学校六年）の「くるみもち作り」はもち作りや、くるみもちを食べる家族の様子が巧みに表現されており、読んでいて温かい気持ちになりました。

図画部門を審査して



元岩手県図画工作・美術協議会
会長
伊藤 満久

レベルの高い本作品コンクールでの受賞おめでとうございます。今年も明るく伸び伸びと元氣いっぱい描かれている作品や、きめ細かく主題を的確にとらえている作品等に感動しながら審査させていただきました。

改めて受賞された皆さん、受賞校、そして指導された先生や家族の皆さんにお祝い申し上げます。

本コンクール図画部門には、県内全域から二四八点（小中合わせて三十校）の応募がありました（勿論校内で選ばれた密度の濃い作品ばかりでした。その中から厳選した九点を全国審査に推薦させていただきましたが、全国では全都道府県から厳選して応募された作品は六九、八〇五点あり、その中から優秀賞が二点入賞するという高い評価を受けました。本当におめでとうございます。

それでは県コンクールで受賞した主な作品について選評いたします。

全国の優秀賞と岩手県知事賞を受賞した小宅紗由さん（盛岡市立城東中二年）の「大好き」は、姉妹がお互いに向い合いながらおにぎりをおいしそうにほおばっている、そのうれしそうな表情、確かなデッサン、柔らかな色調等卓越した完成度の高い作品です。

次にやはり全国で優秀賞を受賞し、岩手県教育長賞も受賞した花巻市立内川目小二年の藤原怜さんの「おいしいごはんをたべるぞ」の作品は、大きく画面からはみ出るぐらいの笑顔でおいしそうに食べている様子、茶碗いっぱいのごはんからは湯気まで出ているなど臨場感いっぱい力作です。

J A岩手県五連会長賞を見事受賞した大船渡市立綾里中二年の古川このみさんの「おばあちゃん草刈りご苦労さん」の作品は、おばあさんへ「ごろうさん」と声をかけている女の子（自分でしようね）の笑顔と、疲労してもう

日本農業新聞東北支所長賞を受賞した角嶋優美さん（洋野町立宿戸中学校一年）の「お米と話す」は、食卓を囲む家族の描写が優れており、家族への思いや、家族の温かさ、お米と話す優美さんの様子がよく描かれていました。

優秀賞を受賞した菊池怜史さん（奥州市立木細工小学校三年）の「みそおにぎり」は、作っている様子を順序よく上手にまとめました。兄妹のふれあいや、お母さんのために頑張っている様子が想像でき、ほほえましく思いました。

同じく優秀賞を受賞した菅野蓮未さん（花巻市立石鳥谷中学校一年）の「農業と食育に学ぶ」は、稲作体験やおうちの方の食育について、文章の構成を工夫して綴っていました。管理栄養士になるという気持ちの高まりを感じることができました。

稲作や食事づくりなど、豊かな体験を通して書かれた作品から、体験の感動、ごはん食を食べられることへの感謝の思い、温かな家族の愛情がよく伝わってきました。また、自分の住んでいる地域や、自分の生活を見つめる貴重な機会となり、社会で自立する力を身に付けることにもつながっていることを感じることもできました。

今後、多くの子どもたちが主体的に「ごはん・お米」に関する様々な体験を行い、表現する機会を大切にしていただくことを期待して、講評といたします。

【全国コンクール】

◆優秀賞

藤原 怜	花巻市立内川目小学校	2年	「おいしいごはんをたべるぞ」
小宅 紗由	盛岡市立城東中学校	2年	「大好き」

【岩手県コンクール】

◆岩手県知事賞

小宅 紗由	盛岡市立城東中学校	2年	「大好き」
-------	-----------	----	-------

◆岩手県教育長賞

藤原 怜	花巻市立内川目小学校	2年	「おいしいごはんをたべるぞ」
------	------------	----	----------------

◆JA岩手県五連会長賞

古川 このみ	大船渡市立綾里中学校	2年	「おばあちゃん草刈りご苦労さん」
--------	------------	----	------------------

◆一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局長賞

伊藤 愛来	北上市立飯豊小学校	3年	「田植えをしたよ」
-------	-----------	----	-----------

◆株式会社日本農業新聞東北支所長賞

木元 小春	遠野市立遠野北小学校	4年	「お米とわたし」
-------	------------	----	----------

◆優秀賞

高橋 那緒	北上市立江釣子小学校	3年	「ごはんはやっぱりおいしいよ」
大向 絢子	盛岡市立見前中学校	1年	「私とカレーライス」

◆学校奨励賞

花巻市立内川目小学校			
------------	--	--	--

◆佳作

八重樫叶夢	飯豊小	3年	「田植えをしたよ」	内館 梨紗	江釣子小	6年	「稲刈り」
熊谷 晴乃	黒沢尻西小	2年	「たきたてごはん いっぱいたべるぞ」	戸野村悠輝	江釣子小	4年	「ごはんはうまい！」
佐々木優羽	内川目小	2年	「ごはんだいすき」	八重樫真優	江釣子小	6年	「田植えを思い出すね。 おいしい！」
千葉梨緒那	一関小	2年	「おいしい おむすびつくるう」	高橋 結海	沢内小	4年	「花見でおにぎり」
佐藤 楓月	舞川小	3年	「おにぎりを食べるわたし」	菊池 惺麗	岩谷堂小	4年	「はじめての稲刈」
岩谷 美風	岩谷堂小	1年	「みんなでパーティー、 おいしいごはん」	北田なつき	城東中	2年	「朝ごはん」
高橋 優	黒沢尻北小	4年	「収穫」	小笠原成奈	見前中	1年	「笑顔で食べる おいしいお米」
昆 璃音	黒沢尻北小	5年	「お米、おいしい！」	及川 来智	見前中	1年	「友人は おにぎりをたべていた。」
鈴木 愛菜	黒沢尻北小	5年	「家族みんな、お米パワーで 笑顔いっぱい！」	高橋 風花	見前中	1年	「おにぎり わたしの思い出」
斉藤 妃羅	江釣子小	6年	「農家の人が一生けん命育てた お米はおいしいよ！」	佐々木亜弥音	遠野西中	2年	「お米づくり 心も力も合わせます」

【全国コンクール】

◆農林水産大臣賞

畠山 公	大船渡市立盛小学校	6年	「僕と未来をつなぐ米」
◆学校奨励賞			
大船渡市立盛小学校			

【岩手県コンクール】

◆岩手県知事賞

畠山 公	大船渡市立盛小学校	6年	「僕と未来をつなぐ米」
------	-----------	----	-------------

◆岩手県教育長賞

吉田 優斗	盛岡市立城西中学校	1年	「思い出の味」
-------	-----------	----	---------

◆JA岩手県五連会長賞

菊池 優花	奥州市立木細工小学校	2年	「もちごめごはん」
-------	------------	----	-----------

◆一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局長賞

菊池 飛鳥	奥州市立木細工小学校	6年	「くるみもち作り」
-------	------------	----	-----------

◆株式会社日本農業新聞東北支所長賞

角嶋 優美	洋野町立宿戸中学校	1年	「お米と話す」
-------	-----------	----	---------

◆優秀賞

菊池 怜史	奥州市立木細工小学校	3年	「みそおにぎり」
菅野 蓮未	花巻市立石鳥谷中学校	1年	「農業と食育に学ぶ」

◆学校奨励賞

大船渡市立盛小学校			
-----------	--	--	--

◆佳作

菊池 苺	木細工小	2年	「ごはんづくり」	菊池 明莉	木細工小	5年	「大切なお米」
菊池 智果	木細工小	2年	「大すきなおべん当」				
菊池 紗央理	木細工小	2年	「ピクニック」	多田 真穂	東和中	2年	「私達とお米、お米と私達」
菊池 美桜	木細工小	2年	「ごはんは大切」	伊藤 樹音	東和中	1年	「祖父母の美味しいお米」
菊池 望夢	木細工小	3年	「チャーハン作り」	佐々木葵衣	遠野東中	3年	「思い出のおにぎり」
千葉 郁斗	川崎小	2年	「おこめにかんしゃ」	鈴木 智菜	一関二高附属中	1年	「食べることの力」
				佐々木瑠星	川井中	3年	「最後の一粒」
菊池 美乃里	木細工小	6年	「米作り」	千葉 菜央	一関二高附属中	2年	「スーパー食材」
神津 心	越喜来小	5年	「ご飯がおいしい理由」				
村上 心元	矢作小	6年	「大切な『お米』」				
小山 希来	室根東小	5年	「大変なお米作り」				
平沢 榎澄	一関小	4年	「大好きなお米」				
菊池 理子	玉里小	5年	「愛情いっぱいのお米」				

第41回「ごはん・お米とわたし」 作文・図画コンクールの概要

応募点数

学 校	作 文	図 画	合 計
小学校	22	232	254
中学校	64	16	80
計	86	248	334

応募締切日

平成28年9月9日

県コンクール第1次審査会

平成28年10月18日（全国コンクール推薦作品18点を決定）

県コンクール第2次審査会

平成28年12月9日

表彰式

平成29年2月1日 盛岡市「ホテルルイズ」

主催

岩手県内J A・J A岩手県中央会

後援

岩手県・岩手県教育委員会・いわて純情米需要拡大推進協議会
一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局・株式会社日本農業新聞東北支所
J A岩手県信連・J A岩手県厚生連・J A全農いわて・J A共済連岩手

審査員（敬称略）

審査委員長	八重樫	勝	元岩手県教育委員会教育委員長
審査委員	伊藤	満久	元岩手県図画工作・美術協議会会長
審査委員	小林	満	盛岡市教育委員会事務局学校教育課主任指導主事
審査委員	星野	圭樹	岩手県農林水産部県産米戦略室県産米戦略監
審査委員	平間	聡	（一社）家の光協会北海道東北普及文化局局次長
審査委員	中山	浩彦	（株）日本農業新聞東北支所支所長
審査委員	菅原	和則	J A岩手県信連代表理事専務
審査委員	細川	修一	J A岩手県厚生連常務理事
審査委員	畠山	俊彰	J A全農いわて県本部長
審査委員	小原	市右エ門	J A共済連岩手県本部長
審査委員	畠山	房郎	J A岩手県中央会常務理事

※このコンクールに対するご意見・ご感想をお待ちしております。

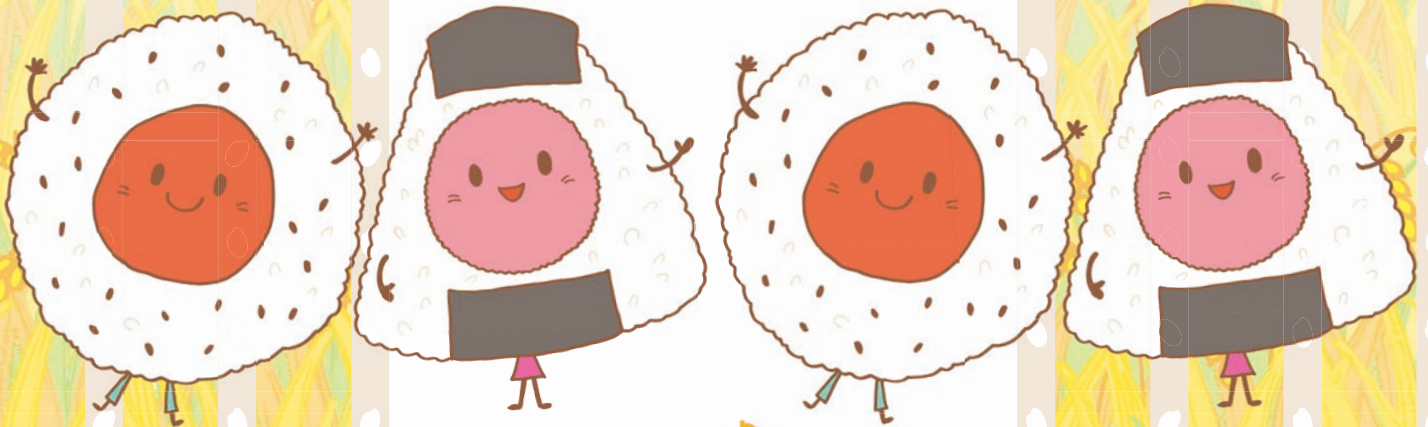
JA岩手県中央会 JA総合対策部 〒020-0022 盛岡市大通一丁目2番1号 TEL019-626-8519
ホームページ<http://www.ja-iwate.or.jp/> Eメールアドレス kouhou@jaiwate.or.jp

みんなの**力**で!



がんばろう!岩手

JAいわてグループ



さあ、みんなで取り組んでいこう。
やっぱり国産農畜産物推進運動
～みんなのよい食プロジェクト～

発行／平成29年2月1日 企画・編集・発行／JA岩手県中央会 印刷・製本／川嶋印刷株式会社